

第1回学校運営協議会議事録

日時：令和8年4月14日（火）午後2時から4時まで

場所：静岡県立藤枝東高等学校

参加者：学校運営協議会委員6名、本校管理職5名

オブザーバ参加：本校運営委員

1 学校からの説明

学校経営計画・校務分掌・学校行事について

○全日制 学校経営計画

- スクールミッション：文理横断の教育課程と探究教育を通じ「新たな価値を創出し、未来社会を切り開くグローバルリーダー」を育成。

- スクールポリシーの位置付け

 - アドミッションポリシー：本校が求める生徒像の提示。

 - カリキュラムポリシー：教育課程編成と教育活動の方針。

 - グラデュエーションポリシー：3年間で身につける8つの力を宣言。

- スクールポリシーの具現化と年度重点目標（ア～カ）

 - 文理横断で達成方法と成果目標を明確化し年度計画をスタート

 - ア 探究力育成と8つの力：総合的な探究の時間・授業で8つの力を意識して計画・実施。成果目標は「新たな価値を創出し、未来を切り拓く意欲がある」と回答する生徒80%以上

 - イ 進路支援：進路課中心に受験科目の充実、学年段階に応じた意欲向上

 - ウ 多様性と国際的視野：図書課・生徒課・学年・体育課・国際交流委員会で推進。2年生は全員で台湾修学旅行。成果目標は「グローバルな視野で多角的に思考できる」80%以上

 - エ 生活指導・安全・人権：事故防止・人権啓発・いじめ防止を継続

 - オ 保護者・地域連携と広報：PTA連携、公開授業・一日体験入学の充実。少子化・私学無償化に対応し募集活動継続

 - カ 教育環境・心理的安全性・働き方改革：特別支援体制強化、校舎管理・部活動計画明確化で教員の時間外勤務を削減

○定時制 学校経営計画

- スクールミッション：志榛地区の定時制高校として、生徒一人一人の個性や理解度に応じた「わかる授業」と地域に根ざした教育活動により、自信と自覚を持つ自立した人間を育成

- 最終年度を大切に過ごす姿勢を強調

- 学ぶ意欲を高め基礎学力の定着を図るため、各科目を丁寧に教えられる学習環境を整備

- 進路実現に資する勤労観・職業観の育成として、進路講演会・進路セミナー、地域の進路支援の活用を計画

2 学校運営協議会委員長・副委員長の決定

3 学校経営計画についての質問・意見交換

○グラデュエーションポリシーの「統率力」に関する質問

•質問：「統率力」が欠けているとの自己申告が多い点について、(1)生徒が統率力を身につけたいと望んでいるのか、(2)単に不足を分析して終わっているのか、の意図の違いを確認。「なりたいたいと思っているかどうか」で支援の在り方が大きく異なるのではないかと。

•回答：学校のミッション（社会をリードする人材育成）と生徒の自己分析の間に乖離もある。どのように「責任を持ち、前に立ち、まとめる人になりたい」と思えるようにするかは授業や教育活動次第であり、その問題意識は生徒に投げかけている。

○取組の成果目標パーセンテージ設定に関する質問

•質問：本年度の取組の成果目標における85%、80%、90%、75%などのバラツキの基準有無、国指標等との整合があるかを確認。

•回答：統一基準はない。担当課・担当教科が新しい内容について確認の上、本校生徒で「この程度は目標にしたい」という水準を設定しているため数値にバラつきがある。「達成できるはず」の水準よりやや上を目標として設定している。

•提案：スクールポリシーの「卒業時の姿」を踏まえ、定量評価に加え「子どもの具体的な姿・現れ」の事例を追うことを検討したらどうか。

•提案：ICTを活用し、年1回程度、生徒の振り返り記述をテキスト化して分析。教員が設定したキーワード（例：「追求が面白かった」等）に基づき、該当記述の出現数や増減を把握するなどして、自由記述のテキスト化とキーワード分析による具体的表れの可視化する。

○授業改善（ICT活用・対話学習）への評価

•1人1台端末の自然な活用と効果的な指導、対話場面の増加が評価された。昨年の話題（講義型からの転換、対話の増加）の継続改善も確認。

○教員研修方針の確認

•質問：今年度の教員研修の計画について

•回答：研修テーマは昨年度と同様に「生徒の発達指示的生徒指導」。新しい生徒指導提要の考え方を浸透させる内容を年間通して実施。その他、3月末には総合教育センター指導主任を招き、「総合的な探究の時間」の改良（生徒主体の課題発見・挑戦、授業構成）に関する教員研修を実施した。研修後に活発な議論が生じている。

○グラデュエーションポリシー8項目の生徒への周知・振り返り機会に関する質問

•質問：8つの目標を生徒に求めていることとして明確に開示し、理解させているかを確認。

•回答：行事後に8つのポリシーについて生徒が自分なりに振り返る機会を設けている。全行事

での実施は難しいが、年度途中や年度末、行事ごとに取り組む場合がある。

○探究学習の本質と指導上の困難に関する懸念について。

- 懸念：高校の現場では、1クラス約40名が各自異なる探究テーマを持つと、少人数での大学の指導より格段に難易度が上がる。流れ作業的な対応や安直なネット依存で形だけにならないよう、生徒が長いスパンでテーマに向き合える体制を構築することができるか。
- 学校側の現状説明：昨年度の1年生から課題発見・解決・発表のプロセスを経験させるため、新しい探究システムを導入し、地域企業と連携して課題発見から課題解決、最終発表までを実施した。今年2年生となる該当生徒に対し、各自のテーマ設定から情報収集・分析・文章化まで行う本格的な探究を進め始めていると説明。人員体制の制約（教員2人でついても20人に1人程度）に対し、運営方法の工夫をしていく。
- 提案：全員が高度な探究を行う必要はないが、テーマ設定・調べ方・まとめ方に関する教員の助言が重要である。自ら情報の信頼性を確認し、図書館で文献調査を行うなど「地に足のついた」調査姿勢の育成が必要。
- 提案：探究の面白さは「継続」にあり、社会科学でも同様に、長く調べ続けて自分なりの結論に至る経験自体が大きな成果と評価となる。つまらないテーマと見なさず、継続的に取り組める題材を支援すること、「楽しい」・「無駄な」テーマも大事である。
- 提案：文化祭等で優れた継続探究をポスター発表などで披露し自信を付与する場を設ける。

4 学校経営計画の承認